



取材日:平成25年8月9日(金)

取材先:NPO 法人 伊賀の伝丸(三重県伊賀市)

レポーター名:三重大学人文学部法律経済学科3年 丹羽瑛斗志

外国人を「支援」するのではなく外国人との「共生」を目指す NPO

グローバル化が進み、多くの外国人が日本を訪れるだけでなく、仕事のために永住するということも少なくない。必然と日本国内で外国人と接する機会は多くなる。

2013年現在、三重県の外国人比率は全国第3位。100か国の人々が三重県内に住んでいる。外国人の比率が多ければ多いほど外国人と街で接する機会は増える。しかし、言葉がわからない、文化が合わないなどの理由でお互いを理解できず、一線を画したまま生活しているということも少なくないであろう。

そんな中、三重県伊賀市には外国人との『共生』を目指し日々活動している NPO 法人が存在する。

「NPO 法人 伊賀の伝丸」は伊賀を中心に多言語通訳、多言語翻訳、多文化共生生活相談、講師派遣などを行なう NPO 法人である。その中でも私が「NPO 法人 伊賀の伝丸」を取材して興味を持ち、伝えたいと思った取り組みは、日本語、ポルトガル語、中国語、スペイン語、韓国語、タイ語、計6か国の言語であいさつが記されている、あいさつ会話集を作成していることだ。この取り組みにより外国人が日本語を学び日本語で話しかけるといった一方的な関係ではなく、日本人がその各々の外国語のあいさつを知る、学ぶことでより親密な関係性が築けると思うからである。そして何よりも NPO 法人伊賀の伝丸の代表である和田さんが語っていた「お互いの母語であいさつができると受け入れてくれているような感じがする」という言葉に共感を覚えた。私自身、異国の地に足を踏み入れた際、日本語であいさつをされるとなにかほっとした気持ちがし、その後の会話も自然と深まっていったように感じる。あいさつはすべての会話のスタートであり、それができないことには会話の発展へとはなかなか繋がっていかない。この取り組みは和田さんと菊山さんがかつて海外で暮らし、苦労した実体験があるからこそ生まれたもののように感じる。

また、この取組は和田さんが語っていた「外国人支援ではなく、外国人と共生する」という発言にも大きく関わってくる。お互いがお互いを受け入れているという気持ちをあいさつにより示すことができる。そうすることで、その後の関わりの幅を多大に広げ、日本人が外国人を助けるという一方的な関係を築くのみではなく、時には外国人が日本人を助け、積極的に話しかけるとい

うような『共生』の可能性を生み出す大きな一歩になり得る。

「NPO 法人 伊賀の伝丸」の今後の活動により、より多くの外国人、いや日本人までも巻き込んだ『共生』が広がっていくことを願う。

今後、「NPO 法人 伊賀の伝丸」が活動の幅を広げていくためには「NPO 法人 伊賀の伝丸」の代表である和田さんが自ら語っていたことでもあります、情報発信する機会を増やすことです。現在も HP や Facebook を使った情報発信をしているようですがもっと積極的に利用する必要があると私は思います。また、Facebook や Twitter といった世界的な SNS ツールを「NPO 法人 伊賀の伝丸」自体が情報発信の手段として使うだけでなく、伝丸の活動に関与していただいた方々にも Facebook や Twitter などを使って積極的に情報をシェアし、発信してもらうことにより、その活動に興味がある人だけでなく、興味がなかった人に対しても活動を知ってもらうことに繋がると考えられます。NPO 全体に言えることかもしれませんが、やはり認知度がまだまだ低く、自分が興味のある分野、自分の住んでいる地域の活動でさえも知らない、伝わっていないといったことが多く存在するように思います。Facebook や Twitter は一対一ではなく一対多で繋がっているツールです。利用することで多くの人々に情報を知ってもらうだけでなく、知恵やアイデアを提案してもらうことが可能になると考えられます。